

ラズベリーシャウト

登場人物

もと宇宙飛行士の通達員

息子を待つ母親

窃盗団 もと演出家

もと劇作家

もと役者

種を持つ少女

少女の音楽隊

アコーディオン

オーボエ

ギター

トライアングル

匿名通達員 1

匿名通達員 2

匿名通達員 3

匿名通達員 4

暗闇。

音がする。

それが何の音かは分からない。

ただ音がする。

這い回るような。

呼吸するような。

叫ぶような。

ただの静寂かもしれない。

静寂という、音がする。

静寂のその奥に、

機械的な音がするかもしれない。

通信の音。

人の声。

英語も混じって、ドイツ語も、フランス語も、日本語も、中国語も。

混線する音も。

くぐもった声が聞こえる。

まるで誰かに語りかけるような。

「甘い臭いがするんですよ。ちょっと焦げた……」

誰の声なのか、

「ラズベリーパイの臭いに似ていると言ったことがあったりね」

今は分からない。

「しますか？ そんな臭い……ああ、そうか、すみません。癖なんです、私の」

だが、絶えず誰かに語りかける。

「見えますか。あの緑と青色。見えますか……」

その語りかける言葉の合間にも、

「あのね、ちよつと思うことがあるんですよ。この音、まるで呼吸するような、まるで音楽のような……」

やっぱりあの不思議な音が聞こえ続ける。

「すみません。何かを話していないと、耐えられそうにないんです」

誰かの呼吸音。

誰かの音楽。

それも今はなんの音なのか、
分からない。

母親 外は砂ばかりでしょう？

母親、通達員になにか暖かいものが入ったカップをすすめた。

通達員 どうも……すみません。いただきます。

母親 風もずいぶん強くなって。

通達員 ええ。

母親 ここまで来るの、毎回大変でしょう？

通達員 仕事ですので。

母親 ええ？

と、母親、まるで耳が遠いふりをする。

通達員 あ、その、これは通達の仕事、ですので、

母親 ああ？

と、再び耳が通りふりをする。

通達員 ですから、つうたつのおしごとお、

母親 そんな大きな声出さなくても聞こえておりますのよ。

通達員 ですよ。

母親 何回も聞きましたからもう十分です。

通達員 なら分かっていただけでしたか。ではすぐに移動の準備を、

母親 は？ 移動？

通達員 ええ。

母親 え？ どこからどこに？

通達員 ですから、ここから新しい星へ、

母親 やだ、初耳。

通達員 なわけないでしょう、もう何度も、

母親 あらどうも初めまして。まあすみません、お茶も出しませんで、

通達員 いや、頂いてますから。

母親 やだ、私ったらいつの間に？

通達員 呆けたフリも耳が遠いフリももう結構ですから。

母親 だってアナタ、とつてもしっこいんですもの。

通達員 あなたには負けます。

母親 もうお気になさらず。

通達員 そういうわけにも、

母親 そう言われてもどこにも移動するつもりはありません。

風が窓ガラスを叩いた。

通達員 ですが、

母親 長女のほうはとくに嫁に行きまして、あら、娘の話はしたかしら？

通達員 ええ。1回目の訪問の時に。

母親 そう、ね、あの子はもう移動しました？ なんてあなたに聞いて分かる
ものですか？

通達員はスチールトランクを開けて、何かを操作する。

通達員 ええ、先週にもう、

母親 あら、そう。孫たちも、もちろん一緒よね？

通達員 はい。旦那さんも含めご家族4人で移動されました。

母親 ああ、そう、通達員の方はなんでもご存知なのね。安心した。それ、

通達員 はい。

母親 お飲みになったらどうぞお引き取りくださいな。ちびちび飲まずにぐつ
と飲み干して、

通達員 これが最後の通達なんですよ。

母親 ええ。さっき聞きましたよ。戸口で。

通達員 この地区の、他の人たちはもうすでに移動してしまいました。この
家だけが、その、お宅だけが、

母親 あら、お隣も？

通達員 ええ、もうすでに。

母親 あんなに仲良くしていたのに挨拶のひとつもなかったわ。やっぱりヨー
ロッパ系の人とは気が合わないのかしら。個人主義とかいうのでしょうか？ ね
え。アジア系の方たちは挨拶にはうるさいでしょ？ そうですか、だから最近
見かけなかったのね。あなたは、コリア？ チャイナ？

通達員 日本人です。

母親 ああ、そう。もう最近じゃ分からないくらいいたくさんでしょう？ そう、

どうりで、

通達員 私は日本人専任の通達員ですから。

母親 じゃ、通達員はその国の人たちが訪問しにくるの？

通達員 ええ、説得するには、その、色々と、宗教的なことも含めてお話したほうが、

母親 私は信じる宗教はありませんので説得できませんわよ。

通達員 すみません、ですが隣の地区の人たちも、もうみんな移動しました。

母親 みんながやっているからってあなたまでやらなくてもいいのよって、子どもたちにそう教えて今までやってきましたのよ。

通達員 え。

母親 ほら、いたずらとかね。学校の先生になんでやったんだって問い詰められたら子どもは決まって、「ナントカちゃんもやってたから」って言い訳するでしょう。そういう時にね、

通達員 これは悪戯ではないですよ。緊急避難です。

母親 存じ上げております。

通達員 だったら、

母親 もうどこに行っても住めないなんてねえ。

母親、窓の外を見る。

母親 荒れ果ててしまいましたわねえホントに。

通達員 ええ。

母親 昨年くらいからね、どんな種を植えても何にも実らないんですの。ほつとしてもツルを伸ばすジャスミンも枯れ果てましたわ。末期ですわね、ここは。

通達員 そこまで分かっているらしいのなら、

母親 息子を待っておりますの。

通達員 え。

母親 造船所に働きに行っている息子が帰ってくるのを待っていますの。

通達員 息子さんは……

通達員はスチールランクの中の機械を見る。

母親 息子は船を作るんだって言うておりましたね。必ず作るから待っててね、母さんと言ったんですの。いろんな動物をツガイで乗せられるほどの船を。新天地に連れていってくれる船を。ねえ母さん。ここはいずれ住めなくなる。だ

から新しい星に行かないや。一目散に連れていくよ母さん。鳩も船に乗せておくからもし嵐にあったって大丈夫だ、鳩がきつと導いてくれるだろうから。なによりも船だ、技術を学ばなきゃいけない。船の職人になるんだって、修行は辛いけれど僕は必ず作るよ……って、夏休みの宿題の工作なんてちっとも作れなかったあの子がねえ。

通達員 ああ、息子さんは、

母親 そう、言っていたのに連絡が来ませんの。

通達員 それは、

母親 3年前からふっとり。それまでは毎日3Dプログラムでやりとりしていたのに、あれ便利ねえ昔は黒電話だったのに、目の前で動くでしょう、そこにいるみたいであれ便利、それがねえ、ふっとり。

通達員 船に乗りましょう。この地区の船着場に今日出発の船が停まっています。まだ乗れるんです。

母親 息子が戻りませんので。

通達員 通達は三度までです。三度の通達後、移動しないということはそれは本人の意思だということになります。今日が最後の通達です。乗りましょう。

母親 あら。今日で4度目じゃございません？

通達員 数えて、おられましたか。

母親 息子をほって、新しいところへなど行けるはずありません。

通達員 ですが、

母親 それに出来ることなら息子が作った船で新しい星へ行きたいわ。

通達員 これが最後の通達です。

通達員は機械を見た。

通達員 ご主人とは……ずいぶん前に離婚されていますね？

母親 ……

通達員 その後、おひとりで娘さんと息子さんを育てられ、ご主人のほうは……すぐに再婚なさって、もう先月には移動されています。娘さんも同じく先月にご家族と移動。息子さんは、その、3年前の世界大戦の際に、

母親 本当に。

母親の声は、否定する。

母親 通達員の方は本当になんでもご存知なのね。

通達員 仕事です。

母親 これは政府のお仕事なの？

通達員 いえ。それだけでは行き届きません……というか、政府自体、もう何も、機能しておりません。私は民間の方からやって参りまして、

母親ほんと、不思議。どうして民間なのにそんなにこと細かに私の家のことを何でも知っていらっしゃるのかしら。

通達員 緊急自体ですので、ひとりでも多くの方を助けるために、

母親 どうでもいいわねそんなこと。こんなに進歩してるんだから指先ひとつで何でも分かるのよね。でもいらぬことです。ほっておいてください。

通達員 私はきちんとした情報をお伝えしたくて、

母親 3度目で終わりならどうして4度目の訪問をなさるの？ ご自分でおっしゃったじゃないの。それは本人の意味だと。

通達員 多くの方が、信じないので。

母親 信じない？

通達員 大げさに言ってるだけだと、思う方もおられて。1度、2度、3度目、これで終わ리と言ってから4度目に尋ねると、周りもずいぶん人が減ってやつと夢から覚めたように荷造りを始める。日常が変わりなく続くはずだと信じたんです。だから、公式には3度目で黒い張り紙を家の戸口に貼りますが、私は……全ての戸口に真っ白な張り紙を貼り付けたんです。

母親 私は疑ってはおりませんのよ。ほら、畑をやっていましたから。

通達員 ええ……

母親 その年によっては実り方はそりやいろいろありますが。

通達員 はい。

母親 もうこの土地は絶望的ですわ。土に触れ、種を触れば分かります。人が住めるところじゃなくなりましたわ。信じます。あなたの通達。それと同じように、

通達員 はい。

母親 息子の命も信じておりますの。

通達員 ですが、ここに、

通達員は機械を見せようとする。

そこには息子に関するデータでもあるのだろうか。

母親 そこに書かれてあることは信じるわけにはいきません。文字や、数字や、そんなものは。

通達員 移動しなければ、ここで一生を終えるということになります。

母親 承知です。

通達員 もう永くはないんです。

母親 承知です。

通達員 ここはもう死んでいます。それに、あの、息子さんは、

母親 あのねえ通達員さん。

通達員 はい。

母親 きちんとした情報って、そんなもの本当にあるのかしら。

通達員 え。

母親 きちんとした情報で、本当に幸せになるのかしら。

通達員 でも、

母親 人は見たいものしか見れないのじゃないかしら。見たいものって何かしら。希望よね。希望を見たいのよね。情報を見たいんじゃないし、真実なんて言葉は誰かが用意した思い込みじゃないのかしら。自分が信じているものにか、人は心を動かされないものでございましょう？

母親 息子の命を信じておりますの。

母親 息子が帰ってくるのを待っておりますの。

通達員 よく聞いてください。ここは、地球は、もうしばらくすると崩れ消えさり消滅します。ここに残っていればあなたも同じく、

母親 ご苦勞様です。どうぞお引き取りくださいませ。

母親は、通達員に頭を下げた。

通達員はスチールトランクの中から、

黒い紙を取り出す。

戸口に貼る。

風が吹くと、

黒い張り紙はハタハタと震えた。

移動済みの家には白。

通達員は白い張り紙を貼る。

ただいま荷造り中の家は緑色。

通達員は緑色の張り紙を貼る。

家族の中で意見が分かれている家は黄色。

通達員は黄色の張り紙を貼る。

2度目の訪問から一週間経つても移動する気配が見えない家には赤色

通達員は赤色の張り紙を貼る。

3度目、いや、それ以上、再三の訪問にも関わらず、強固な意思でも

トランクの中から、黒い張り紙を取り出し貼り付ける。

黒

通達員、振り返り、見る。

白、綠、黃色、赤、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、白、黑……

見えるかぎりの景色を、遠くまで見る。

ここは……人が少なくなったのに、色んな臭いがする。

誰の家かも知からない。

もう映らなくなったテレビ。散らかったテーブル。

酒の瓶の口から一滴落ちてきやしないかと口を開けている役者。

何かに熱中している劇作家。

演出 いやー困ったね。

と、お札を数える演出。

演出 世の中、こんなことになっちまって、ほんと、困った困った。いやー、大変だね。

と、お札を数える。

役者 口ばかり。口もと、ニヤついてるよ。

演出 言葉と内面が合致しないのが人間ってもんだから。「悲しい」ってセリフをやたらと情感たっぷりに「悲しい」って演じる女優とかいるだろう、

役者 ああ、いたねえ、随分前に客演で呼んだあの女優だ。

演出 ああいうのを下手な役者っていうんだよ。なんでもかんでも説明しやがって、想像する余地を与えないんじゃない？

役者 その割には褒めてたじゃない？

演出 だってヘソ曲げるんだもん。2秒でヘソ曲げるのに、機嫌治すのに2時間かかんぞ。面倒な女は褒めて伸ばす、これが演出の極意。

役者 え、じゃ、なんで俺のことはあんなに叩きに叩くわけ？

演出 お前って役者は、叩くと伸びるからだよ。ちゃあんとその人に合った育て方をしてたってこと。

役者 いや、あれは完全に八つ当たりだってわかってるし口ばかり。で？

演出 うん？

役者 稼ぎはいかほど？

ニヤリ。

演出 やー、ほんと困った困ったこんなに稼げちゃうなんて。

役者 狙い目は荷造りやってる緑色の家だね。

演出 金目のもんとかキチンとまとめてやがるからな。

役者 家探ししなくてもいいから仕事はかどる。

演出 白い家も、探せば結構掘り出しもんが見つかるからな。

突然、劇作家が咆哮した。

役者・演出 お、おお、おお、どうした、どうした？

劇作家はゴロゴロのたうち回り、

役者 どうしたー？

演出 よし、来い、どうしたー！？

どうにもできないけれども、なんとかなだめようとする役者と演出。
劇作家、そのうちゴロリと、死んだようになる。

演出 どう？

役者 ちょっと瞳孔開き気味かな。

演出 あ、息はしてるよな？

役者 うーん、どうだろう。

ガバッと起き上がる。

役者・演出 おおっ！？

劇作家、ポツリとつぶやいた。

劇作家 ……書けない。

そしてまたバタリと倒れ込んだ。

役者 いつものことでしょ。

演出 ていうか、書けたためしが今までにあったのかって話だよな。

役者 書けないってさ、今まで書けていた人だからこそ言える言葉だよな。

演出 これはな、プレイだ。

役者 プレイ？

演出 苦しみ苦しみ抜いて書いたほうが愛着ワクだろう。そういうプレイだよ。
役者 苦勞したとか、そういうのいる？ 僕はやだなー。寝ながら書いたのに傑作、とかのほうがいいんだけど。

演出 お前ね、若いね。苦勞なくして達成はないんだよ？

役者 それ思い込みだと思うけど。

演出 だって役者だってなんも稽古してなかったら出来ないだろ？

役者 え、僕が目指すのは、普段は鼻くそしかほじってないのに、舞台に立つたら観客をシビレさせるって役者なんだけど。根性プレイはちよつとスマートじゃないかな。

演出 それ出来るの天才だけじゃないか？

役者 天才なんていないよ。

演出 デニールとか。

役者 めちゃくちや古いよ、それにあれは役者バカでしょ。ていうか、台本ないから稽古しようにも出来ないし。

演出 筋トレでもやっつけ。

役者 それもう飽きた。

演出 で、いつ完成すんの？

劇作家 本番までには。

役者 そのさあ、本番の日にちが締め切りってもういい加減止めない？ 上演予定のない戯曲を書くのが本当の劇作家ってものでしょー？

演出 あ。

役者 なに？

演出 そういやさ、押さえてた劇場だけど、

役者 ああ、うん。

演出 この前、白い張り紙ついてたの、思い出した！

役者 え、だから何？

演出 移動したんだから誰もいないってこと。やりたい放題だろ。高い照明機材も使ってやろうぜ。金ないからAセットにしたんだけど、もう全部使ってやろうぜ。

役者 あ、そっか。でも機材とか船に乗っけてるんじゃない？

演出 いや、積み込み制限あるから。ひとりにつきどのくらいとかって。

役者 企業とかって、個人じゃないならいろいろ乗せられるんじゃないのかな。それよりも、白い張り紙ついたならもう電気止まってんじゃないのかよ。

演出 ヤバイな。偵察行ってこよ。

役者 あ、僕も。

演出 止まったら面倒だな。

役者 どっかから発電機かっぱらって、軽油かっぱらって？

演出 お前、俺らが帰って来る頃には書きかけておけよ。

劇作家 人数は？

演出 あ？

劇作家 登場人物、人数足りないんだけど。

演出 え、何人登場？

劇作家 38人。

演出 いや無理だろ、3人に書き直せよ。

劇作家 客演集めるのはお前の仕事だろおおおお！

演出 現実問題考えろ。俺とこいつとお前しかないの。

劇作家 あ、俺は出ないよ。

演出 じゃふたり芝居にしろ。

劇作家 書きたいことが溢れてくんだよおおおお！

役者 さっき書けないって言ってたのに？

劇作家 こころへんにはっ、あるんだよ、こころへんにはっ！

演出 こころへんじゃなくて、それをこっちに書き写せ、な。

劇作家 それが出来れば苦労しないよおおおお！

ひょっこりと、通達員が顔を出した。

役者 あ。

演出 あ。

劇作家 あ？

通達員 あの一……………え？

通達員、引っ込んで戸口を何か確かめる。

通達員 あの、え、あれ、え？ すみません、え？

何か、要領つかめない。

通達員 その、あの、戸口には、白い、あれ？ 忘れ物か何かでしょうか？

演出　すぐ出て行きますんで。

通達員　え？

役者　あ、あー……そう、ちょっと、一休みしてただけで、ええ……

通達員　え。

劇作家　はい。

通達員　あ、じゃあ、ここの、

演出　じゃないじゃない。

役者　ここの家のじゃない。

劇作家　違う違うこの家の人間じゃなくて、

とか、それぞれが口々に。

通達員　ああ、そうですか。この家の人ではなくて、

演出　ま、そ、通りすがり、的なの？

通達員　今日の船はもうすぐ出発しますが。

3人、何も言わない。

通達員　あの、この地区の船着場から、乗られるんですよ？

役者　あー……いや、隣の地区、からかな。

通達員　では、なぜこの地区に……？

通達員、少し訝る。

演出　うん、それね、うん。

劇作家　劇団員を……

通達員　は？

劇作家　劇団員をね、探しに来て。

通達員　はあ……

劇作家　絶対に移動しないって言い張る奴がいて、そいつがこの地区に住んでいるんで、あいつのことだからテコでも動かないんだろうなと思って、だからみんなだね、一緒に船に乗ろうと。あいつのこと引っ張ってでも乗せなきゃ、そうでしょう？　でも探しても探しても、あいつ見つからなくて、それで歩き疲れて僕らここで少し休もうかと、僕たちはこの地区の住人ではなくて、隣のね、船のチケットも隣の地区のチケットだからこの地区の船着場からは乗れ

ないし、乗るのは今日じゃなくてもかまわないんです。まだ、タイムリミットまで少しあるでしょう？ あいつも一緒に連れて行きたいから、劇団員をほってはいけません。でも、いない、いないんです。あいつ……どこに行ったのか……僕は待つしかないんですかね……

演出 さすがだな、おい。

役者 し。

通達員 ああ、そうですか。ああ、じゃあ、その方のお名前を。

劇作家 ん？

通達員 その、劇団員の方のお名前を。お調べします。もしかしたらもうすでに船に乗ってしまったのかもしれませんが。移動したことが確認できたら皆さんも安心して船に乗れるでしょうから、お名前を。

通達員、スチールランクを開けて、

劇作家 んー……

通達員 はい。

劇作家 ……

通達員 お名前をどうぞ。

名前をすぐに打ち込めるようにスタンバイ。

通達員 この地区だと分かっているならすぐにお調べ出来ます。どうぞ。

劇作家 んー……ご……

通達員 ンーゴ、さん？

劇作家 いや、ゴ、

通達員 ご？

劇作家 ご、どー

通達員 ごどー……ああ、後藤さん、下のお名前は？

劇作家 いや、ゴドー。

通達員 ゴドー……？ フランス系？

劇作家 ああ、ええ、あの、フランス系の中国経由の南アラブ移民だったんで、

通達員 それは移民でしょうか……

劇作家 芸名！ そう、フランス系の中国経由の南アラブ移民のゴドーという、芸名でして、

通達員 あの本名で、

劇作家 いやうちは芸名でしかお互い呼び合わずにいまして、なあイプセン。
役者 ん？ ん、ああ、なんだよ、チーホフ。

劇作家 なあテネシー。

演出 ん？ んん、ああ、テネシーだよ。

劇作家 とまあ、こんなに長い間一緒にいるのに本名さえも知らないもんで。

通達員 本名を知らない？

劇作家 芸術家とはそういうもんでしょう。それぞれがそれぞれの孤独を内に閉じ込め馴れ合うようにいて距離を保ちそれはまるで夜の帳を降ろすように人生の幕も降ろす、

役者 いい、いい、もういい……

通達員 ……ですか……？

演出 だからこうやって足でしか探せないですよ。昭和の刑事みたいに。ええ、ええ、大丈夫です。自分たちのことですからなんとかします。お手数おかけしました。どうぞ……

帰ってくださいと言わんばかりに手を戸口のほうへ。

通達員 はあ……

通達員、戸口へ向かう。3人、少しほっとする。
が、

通達員 あのお。

3人 はい！

通達員 気をつけてください。最近、この状況に紛れて金品狙う窃盗団が潜んでいるらしいので。

3人 気をつけます！

通達員 では……見つかるといいですね。ええと、ゴドーさん。もう、時間がありませんので。

3人 ありがとうございます！

通達員、会釈をしてこの家を出た。
しばらく。

演出 なんだよ、夜の帳を降ろすようになって。距離の話とどう繋がんだよ。

役者　　そういうね、そういうところがダメだ。言葉の雰囲気だけでもってこ
うみたいなのところが、

劇作家　即興であれだけ物語作ったのはすごくない？

演出　　なんで俺がテネシーなんだよ。嫌いなんだよ、あれ。

役者　　あ、そう、僕結構好きだけど。

演出　　違うよ、テネシー好きのやつらが嫌いなんだ。てか、あいつ何？

役者　　通達員ってやつだろう。

演出　　え、政府の？

役者　　さあ？

劇作家　　なあ、この場所、変えよう。

役者　　目、つけられたかもね。

演出　　結構荷物あるからなあ。運び出すのも大変だけど、

役者　　車探せばいいじゃん。キーついてるの。

劇作家　　車だってなかなか見つからないのに、キーつきなんて、

役者　　避難時にはキーもつけてドアもロックせずって注意があったからちゃんと守っているいい人がたぶんいると思うけ……

と、戸口のほうへ。しかし役者、黙った。

演出　　どうした？

役者の背中に声をかけるが、やはり黙ったまま。

劇作家　　おい……

役者、後ずさる。

演出劇作家は、役者が見ている視線の先を見る。

通達員が銃口を役者に向けている姿見える。

通達員　被害届が数件。情報は3人組の窃盗団。通達員の私には情報があります。

役者　　見つけ次第射殺オッケー、とか、そういうのナシね。

通達員　事による。

役者　　コトってなに！？

通達員 通達員の人命が脅かされる時には、
演出 脅かさないよ、ほら、もうきちんとホールドアップしてるし、丸腰だし。
今、人命が脅かされているのは明らかに俺らのほうであなただじゃない。

役者 逆撫でしない！

演出 つーか、つーかさ、そんなん持ってるの危ないし、市民の命だよ、俺ら
だって、

役者 黙って！

演出 え、通達員って政府の役人だよ？

役者 知るかよ。

演出 公務員が市民に銃口向けちゃイカんだろうが。

役者 え、でも警察も公務員じゃないの？

演出 え、こいつ警察？

役者 だから知るかって。

通達員 私は民間の通達員です。

演出 民間！？ なら余計にそんなん持ってちゃダメだしよお！

役者 大声出すな、興奮してトリガー引いたらどーすんだ！？

劇作家 返そうか？ ね？ 盗んだもん全部。ここにあるし、ね？ 返したら

全部チャラで、

通達員 いっですか？

3人 え？

通達員 いっ乗りますか？

3人 ……え？

通達員 船に。新しい星に、いっ行くつもりですか？

3人、静かにお互いを見た。

通達員 すみません。撃つつもりなんてありません。窃盗団と聞いていたから、
これは護身用で。

役者 じゃ降ろせよ。

通達員 いっ船に乗るのかを聞いてから。

役者 は？

通達員 船のチケットは持っていますか？

3人、またお互いをちらりと確認する。

演出 持ってねえ。

通達員 ……え？

演出 持っていないし、行くつもりもない。

通達員 なぜ、

劇作家 本番があるんですよ。

通達員 え？

劇作家 劇団なんです。お芝居の本番がね、あるから。

役者 もう劇場も押さえてる。隣の地区の、駅前の。

通達員 隣の地区はもう移動しました。すでに廃墟です。

劇作家 でもあるんです、本番。

通達員 え？

通達員はどうか理解しようと考えてみるが、

通達員 とは……言っても……あの、誰も……来ない……

演出 だろうかね。

通達員 ですよ、絶対に観に来ません。人が、もうみんなほとんど新しい星へ移動しているのに、この家も、隣の家も、道にも誰もいない。ここで芝居なんかやったってもう誰も、観客がいなければお芝居もなにもないでしょう？

演出 はい。観客が入って初めて完成、です、が。

通達員 だったら、

劇作家 でもやるんです。まだ、書き上げていないけど。

通達員 非常事態なんです。分かりますよね？ 日常じゃない。いつも通りになんて出来ないんですよ。

役者 分かっているし。バイト先もなくなったからこんな窃盗団まがいのことやっただって。

通達員、力が抜けて下がった腕をもう一度持ち上げて銃口を向ける。

通達員 名前と住居を。言ってください。そしたらすぐにチケットの手配をしますから。すぐに。

役者 え、なにその脅し。じゃなきゃ撃っちゃうぞってこと？

通達員 だったらどうですか？ 嫌でしょう？ でも同じことなんです。移動したなら新しい星でいくらだってお芝居出来るんですから、でもここにいたら、劇作家 終わりが観られます。

通達員 え。

劇作家 地球の終わりが観られるでしょうか。決めたんです。最後の観客をこの地球にしようと。僕らのお芝居を地球が観て、地球の終わりを僕らが観る。そう、決めたんです。いえ、初めにそう決めたのは、僕だけでしたが。

通達員、演出と役者のふたりの顔を交互に見る。

演出 通達員さんねえ、おっかないからそれ降ろしてよ。こっちは本当になんも武器的なもん持ってないから。

通達員、ゆっくりと銃口を床に向けた。

演出 劇団員はさ、あと4人いたわけ。全部で7人ね。男ばっか。で、こいつが、そーゆーこと言って残るって。まあ個人の自由だわな。

通達員 それは自由とは言いません。

演出 ま、聞いて聞いて。あとの4人はなんのかんの説得したけどこいつ絶対うんって言わないからもう諦めて船に乗って行っちゃった。お前らも後から来いよって。そんでまた集まって芝居やろうぜって、な。でも俺も残っちゃった。こいつも。

通達員 どうして、

演出 どうしてだろうねえ、ホント。つっても、俺の理由と、こいつの理由は同じじゃない。こいつもこいつの考えがあるんだろうし。

通達員 私は、どこにでもいる、普通の、人間ですから、その、芸術的なことをしている人の感覚は分かりません。でも、

演出 通達員さんは、

通達員 はい……

演出 演劇って人生に必要な？

通達員 え？

演出 なくても生きていけない？ ていうか、劇場に行ったこと今までに何回ある？

通達員 えーと……えーと、子どものころに芸術鑑賞会で……

演出 ね？

通達員 でも、妹の、その姪っ子なんかは好きな役者さんがいてよく観に、

演出 俺はね、

通達員 はい……

演出 絶対に必要だと思うわけ。娯楽でも芸術でも呼び方はナンでもいいけど。人間がいるなら絶対にね。目の前で生身の人間がわちゃわちゃやってて、自分とは違う人間がそこで生きて動いているって観えるわけだろ？

通達員 だから何度も言いますがもう誰も、

演出 本当に？

通達員 え？

演出 本当にひとり残らず移動してるのか？

通達員 それは……

演出 俺はね、こいつと違って、地球があ観客があ終わりがあとか、そういうふんわりしたことは何も思わないけど、もしたったひとりでもここに人間がいるなら、そこには演劇があるべきだと思うわけ。来るか来ないか分からなくても。まだ見ぬ観客を待つのも演劇的だってな。ゴドーじゃないけど。

通達員、やはり理解できずにまだ何も言っていない役者を見た。

役者 僕に振った？

通達員、頷く。

役者 いくら劇作家と演出家が踏ん返っていたところで、役者がいなかったら演劇にならないでしょ？

劇作家 今の引っかかる、踏ん返り返ってはいないよね。

演出家 それに俺は演出兼俳優だよ。

役者 でも演出家芝居するからなあ。

演出家 おい。

役者 役者がいなきや無理だよ。だから。

通達員 それだけ、ですか？ ここに残る理由は……

役者 なんで？ 十分だよ。それに、

通達員 それに？

役者 面白そうだし。

通達員 は。

役者 地球の終わりに面白そうって、不謹慎？ 不純？ 極まらない？

通達員、もう拳銃を握りしめる気力もない。

役者 でも最大の理由は。

通達員 はい……

役者 この二人がやるっていうんだから、やるんだよ。

通達員 は大きくため息をついた。

通達員 ……チケット。

演出 だから船には乗らないって。

通達員 いえ、お芝居のチケット……

演出 え？

通達員 買います。前売りはいくらですか？

トランクから財布を取り出す。

役者 3000円、だけど。

通達員、お札を差し出す。

通達員 じゃあ……2枚……

役者 え？

通達員 あ、いや、こういう時って、1枚じゃなくて2枚買うのが、礼儀なのかと思って、

役者 あんた、律儀だね……

役者は戸惑いながらもチケットと交換する。

通達員 来週の……週末ですか。

劇作家 ええ。

通達員 たぶん、私も、もういないでしょうけど……

チケットをポケットに仕舞う。

通達員 公演の成功をお祈りしております。

通達員、静かに頭を下げ、この家をあとする。

暗闇に音がする。

そしてあの音。

呼吸をするような、あの音楽。

暗闇の中で、

通達員がぼんやりと浮かび上がる。

まるで無重力のように。

手足がゆんわりと動く。

呼吸するような音はずっと聞こえ続けている。

そしてくぐもった声。

「どうやらね、宇宙空間ってやつはね、甘い臭いがするんですよ」

それは通達員の声だと分かる。

「ちよつと焦げた、金属みたいなね。焼き鳥の臭いとか言う人もいるんだけど」

通達員は無重力のような動きで、何かをしている。
撫でるような、そつとどこかに塊を押し出すような。

「誰かがそれを、焦げたラズベリーパイの臭いに似ていると言ったことがあったりね。いいでしょう、ラズベリー。そっちのほうがね、宇宙のロマンと相まってるでしょう」

まるで押し出した手の先に、棺桶でも見えてくるような。

「しますか？ そんな臭い……ああ、そうか、すみません。癖なんです、私の。ずっと、語り続けてしまう癖です。あなたはもう返事などはないのに、すみません。でも」

ゆつくりと手を振る。

「最後に語りかけてもいいですよ？ あなたは、どんな人だったん

でしょうか。どんな風に笑ったんでしょうか。どんな風に怒ったり、悲しんだりしたんでしょうか」

ゆつくりと、手を振り続ける。

「見えますか。あの緑と青色。見えますか……」

そしてまた別の塊をゆんわりと押し出す。

「あのね、ちよつと思ふことがあるんですよ。この音、まるで呼吸するような、まるで音楽のような……これね……そんなわけないと思うんですが、もしかしたら、あれが呼吸している音なんじゃないかって思うんです。生きている音、というかね……」

そしてまた手を振る。

「すみません。何かを話していないと、耐えられそうにないんです」

ゆつくりと手を振り続ける。

「この仕事は……」

振り続ける。

「終わりを見送るこの仕事は……」

ぴたりと。

あの音が止まる。

呼吸する音が止まる。

匿名の通達員たちが4名。

顔も名前も分からないその他の通達員。

皆、同じスチールのトランク、開けて中の機械を操作する。

匿名通達員1 いや、ほんとさっさと移動しろって。いやほんと。

匿名通達員2 そっちの地区どお？

匿名通達員3 んまー、あと3割ってとこかな。

匿名通達員4 あ、こっちはもう終わったから、俺、明日の便で出発するわ。

通達員たち。

匿名通達員 え。

匿名通達員4 お前ら律儀に2回も3回も行くから終わらないんだよ。俺なんかね、1回通達してもう白い紙張っちゃうからね。

匿名通達員1 いやいやそれダメだよほんと。

匿名通達員4 誰か確認すんのか？ いーんだよ。

匿名通達員2 それズルって言わない？

匿名通達員4 効率化って言え。

匿名通達員3 んまー、リミットあるし、どっかで見切りは付けなきゃだけど。

匿名通達員4 通達しましたって事実さえありやいーんだって。残ってるやつらに付き合う義理はないだろ。こっちは体張っての仕事だよ？

匿名通達員1 いやだからこそ金はいんだよ、ほんと。

匿名通達員4 何が蔓延してるか分かんないから命がけだよ？

匿名通達員2 見えないもんねえ。

匿名通達員1 いやいや、こんだけ荒んでりや、いやでも見えるだろうよ。

匿名通達員3 んまー、無人の摩天楼は虚しいさあ。

通達員たち、きつと遙か前方に見えているビル群を眺めた。

匿名の通達員たちの会話に入らず、

少し離れたところにいる通達員と目が合うが、通達員、目をそらす。

匿名通達員4 おい。

通達員、気づかず作業に没頭するふりをする。

匿名通達員 4 おまーだよ、おい、ストーカー通達員。

匿名通達員 2 え、なにそれ。

匿名通達員 4 しつけないの。4回も5回も通達しに行くやつがいるって本部が言ってる、それおまーだろ。迷惑だろうが。3回でいいってんのに困るってよ。みんな早く移動したいんだからさ。おい、きーてんの、え、聞こえてんの？

匿名通達員 2 あー、組織形態無視しちゃダメだね。

匿名通達員 4 張り切ってやったってこれ派遣契約だから功労賞とか貰えないんだよ？

匿名通達員 4、戸口に貼る黒い張り紙を丸めて通達員に投げた。

当たる。当たらなければ当たるまで投げる。

通達員、匿名通達員たちを振り返った。

匿名通達員 4 なんだよ？

やんのかこらあ、と言いたい空気だが、

それを匿名通達員 1 と 3 が、

いやいや

まあまあ

と、言いながら止める。

匿名通達員 4 なになになに？

匿名通達員 1 いや関わらないほうがいいって、ほんと。

匿名通達員 4 え、あいつ？

匿名通達員 1 不気味なんだよ、喋らないし。

匿名通達員 3 ま、噂じゃさ、禊とか言ってる、

匿名通達員 2 みそぎ？

匿名通達員 3 んまーこの仕事、誰もやりたがらないけど金はいいから後ろ暗いやつらがうじゃうじゃしてるし？

匿名通達員 4 あ、俺も詐欺師の常習だしな。

匿名通達員 1 あ、俺は横領バレたところでどうしようもなかったもんね。

匿名通達員 2 ああ、人生イロイロねえ。

匿名通達員 3 あいつ、かなりヤバイとか言われてたよ、噂だけ。

匿名通達員 2 人相、犯罪者顔だよね、なんか分かる。

匿名通達員 4 おい、襖つつーくらいだから、

匿名通達員 1 いや、だからだ。

匿名通達員たち え。

匿名通達員 1 いやほんと、だから最後にイイことしたいんだ。

匿名通達員 4 ん？

匿名通達員 1 4回も5回も通達するのは、あれだ、ひとりでも多く助けたって思いたいんだ。

匿名通達員 3 んま、罪滅ぼしのな？

匿名通達員 2 だったらどんだけやらかしたったわけ？

匿名通達員 1 いや噂だけど、

通達員、急に匿名通達員たちの目の前に立つ。

匿名通達員 4 おおおおっ……っつ！

匿名通達員 4 が一番ビビる。

匿名通達員 4 んだ、んだよ、んだよ！？

通達員、4人を見る。

通達員 噂ばかりで。どうしてこうなったんでしょう。噂ばかりで。僕らは本当は何も分かってはいない、

通達員、ふと、振り返る。

匿名通達員たちの姿は消え、

通達員 何も分かっては、いないんでしょうか。

通達員 もう聞こえない……

担当地区に立つ通達員。

通達員 白、白、白、白……

見渡してみる。

通達員 ここらへんはもう終了か。

通達員が白い家の戸口から去ろうとした時、

通達員 ？

気配がした。

通達員 この家……移動しているはずなのに……？

そっと覗き込む。

通達員 どなたかいらっしゃいますか……？

返事はない。通達員はトランクを開けて機械を確認する。

通達員 夫婦が一組……すでに昨日、移動済み。だから白い張り紙を貼ったんだ。覚えてる……

通達員、少し考える。

通達員 また……あの窃盗団みたいな……？

もう一度。

通達員 あのだなたか、残っていらっしゃいますかあ！？

やはり返事はない。

通達員 気のせい……

ゴホッ……

咳き込む声がした。

通達員はそっと拳銃を握りしめる。

戸口をすり抜け、廊下を歩く。

拳銃を握り締めながら。

ゴボ。ゴホ。ゴホ。

咳き込む声は次第に大きくなって、

ひとつの部屋の扉から聞こえる。

バン。

と、扉を蹴破り、拳銃を構えた。

通達員 誰かっ……

いるのか……と続けて言うまでもなく。

そこにいたのは、窃盗団でも不法侵入者でもない。

ベッドに横たわる少女がひとり。

通達員 君は……？

少女が顔を上げた。

通達員 誰？

少女 ……あなたは？

通達員 私は……

少女 ここ……私の家よ……

通達員 ここは、この家の夫婦はもう移動したはずで、

少女 パパとママのこと？

通達員 え？

少女 知ってるわ。

通達員 パパと、ママ……？

少女 私を、置いて行ったから。

通達員 ……え？

音楽。

かすかにアコーディオンの音。

振り向くのは少女だけ。

そこにはエアアコーディオンを持った楽隊のひとりが佇む。

通達員 あのですね。

少女 し。

今度はオーボエの音、かすかに。

振り向くのは少女だけ。

そこにはエアオーボエを持った楽隊のひとりが佇む。

さらにギターが、トライアングルが聞こえる。

通達員 し……って、

少女 演奏が、また始まりそうだから。

通達員 え？

しかしそれは少女にしか聞こえない音楽。

少女が背負う名もない音楽隊。

少女、しばし瞼を閉じてその楽隊の音楽を聴く。

通達員は何がなんだかさっぱり分らない。

少女 いいの。私の楽隊よ。

楽隊の音楽は少女に聞こえたまま。

しかし通達員は君が悪くて居心地悪い。

少女 あなた、通達員？

通達員 ええ……

少女 この家はもう移動完了よ。

通達員 でもあなたが、

少女 家庭の事情を説明すればいいの？ パパと、ママは、もうずいぶん、前から、離婚、する、つもりだったけれど、今、この時期、だと移動の、ための

船、のチケットの手配が、ややこしくなっちゃう、から、移動して、から別々の、人生を、始める、みたいで、そこ、に私は、存在しない、の。

少女は明らかに苦しそうに話す。

通達員 もう、いいですから、話さなくても、もう、

通達員はスチールトランクを開け、連絡を取る。

通達員 本部、応答願います。こちらG5。地区NEで瑞弱した少女を、

パタンと、少女がトランクを閉じた。

少女 やめて。

通達員 救急隊を呼びます。

少女 やめて。

通達員 このままでは、

少女 やめて。

通達員、少女の言葉に戸惑う。

少女 パパとママには、ちゃんとさよならを言ったから。

通達員 すぐに連絡を取ります。安心して、

という通達員の言葉を遮る。

少女 あなた私の話、聞いてた？

通達員は少女を見る。

少女 私は、置いて行かれたの。

通達員 ……子どもを捨てる親なんじゃないでしょう。

少女 あなた幸せね。

通達員 え。

少女 そんな親もいるのよ。

通達員は少女の白い顔と、それとは対照的な赤い唇に目を奪われる。
と、思うがそれは赤い血。
だらりと少女の口から流れた。

通達員　っ……！

少女　どうせベッドから出られないから。

通達員　あ……

少女　地球が先か、私が先か。でもまだ大丈夫よ。だってまだ聞こえてるから。

通達員　何が、ですか？

少女　……私の楽隊……

楽隊の音楽、より一層大きく聞こえた。

もちろん少女にだけ。

少女　もう、あんまり、聞こえなくなっていたから、終わりかなあと思っていたけど、

少女、通達員を見た。

少女　あなたが来てからまた聞こえ始めた。ああ、そう、きっと私、喜んでいるんだ。だからか……

通達員　あの……

通達員は少し後ずさった。

少女　何？ 私、気味が悪い？ やっぱり？ よく言われるから慣れてるけど。

少女、真っ赤な口で、ニヤリと笑った。

通達員のトランクに地区の文字が浮かび上がる。

地区A

通達員 若干名残留。

地区AR

通達員 若干名残留。

地区I

通達員 若干名残留。

地区E

通達員 若干名残留。

地区O

通達員 若干名残留。

地区K

通達員 若干名残留。

地区KI

通達員 完了。

地区KO

通達員 若干名残留。

地区 S

通達員 完了。

地区 SI

通達員 完了。

完了、残留、完了、残留と呟く。

次々と地区の文字が浮かび上がる。

地区 SHI、地区 SU、地区 SUM、地区 SE、地区 TA、地区 CHU、地区 CHI、地区 TO、地区 N、地区 NE、地区 B、地区 M……

通達員はとめどなく、残留、完了、残留、完了とつぶやき続ける。

地区 ME

と、浮かび上がった。

通達員 ……完了、とは、言うけれど……

通達員、あの家の戸口の白い張り紙を、ぺりりと剥がした。

通達員 まだ、いる。

やはり少女はベッドに横たわる。
そして楽隊の音楽を聴く。

しかし、楽隊の音は少し弱い。

通達員は立ち尽くす。

少女 いらっしゃい。

通達員 どうも。こんにちは。

少女 これで何度目？

通達員 何度目、でしょうか。

少女 普通は3度までって、聞いたことあるけど。

通達員 私は、少なくとも4度は訪問します。

少女 それ、なんていうか知ってる？

通達員 え？

少女 大きなお世話。

通達員 ……なんでしょうか。

少女 いつも帰る時に、「ではまた来ます」って言うから社交辞令かなと思っ
てたのに、本当に何回も何回も来るのね。

通達員 また来ますと言ったからには。

少女 しつこいって言われない？

通達員 よく言われます。

少女 私をかわいそうだと思うから？ だからあれから毎日来てくれるの？
それともただのロリコン？ 下心？ 変態なだけ？

通達員 そんなことは……

少女、通達員を見た。

通達員 ただ、分からないだけで。

少女 何が？ 自分の性的指向が？

通達員 でなくて。

少女 なに？

通達員 チケットの手配も言っているのに、受け取らない人がいます。
あなた以外に、他にも。移動できると言っているのに……私にはそれが理解で
きなくて、

少女 あなた、いい人ね。

通達員 ……私が？

少女 それは言われたことない？

通達員 ……いいえ……人と……

少女 え？

通達員 こんなに……人と、生きている人と、言葉を交わしたことも、今まであまりなくて……

少女 大人の引きこもり？

通達員 仕事上、です。

少女 通達員って人と会う仕事じゃないの？

通達員 この仕事の前、です。だから、通達員に応募しました。今までは、いろんな人の終わりばかりを見てきたので、今度は、出発の、始まりの手伝いをして思っていたのにこんな、

通達員、はたと気がつく。

少女 こんなキツイ家庭に出くわしちゃって？

通達員 すみません。

少女 いいの。

通達員 こんな、私の話はいいです。すみません。あの、

少女 なに？

通達員 食べて、いますか……？

少女 私が？ 食べられると思う？

通達員 ……思いません。すみません。

少女 ああ、また小さくなっちゃった。

通達員 楽隊、の音楽が、ですか？

少女 生まれた時からずっと一緒にいるの。誰に言っても信じてもらえないけれど。ああ……

少女、楽隊の音楽に耳を傾けた。

通達員 何ですか？

少女 大きなお世話とか言いながら、結構楽しんでるんだ、私。

通達員 え？

少女 喜んでいるのか、怒っているのか、悲しんでいるのか、楽隊の音楽で自

分のが分かるの。ずっとそうなの。だからみんな私と同じように、自分の楽隊を持っているんだって思っていたのに、そうじゃないんですよ？

通達員 そう、ですね。少なくとも、私には、楽隊っていうのは、ないですが、少女 が？

通達員 いえ……

少女 なあに？ 何か言いかけたでしょ？

通達員 いえ、大したことでは……

通達員、ただ黙る。

少女 不思議。私、生きているものにはみんな楽隊がくつついているんだとばかり思っていたのに。

通達員 え。

少女 風が吹く音楽を知らないの？

窓から、風が入り込んで通達員の頬を撫でる。

少女 ほらいま。

しかし通達員には聞こえるわけもない。

少女 雲が動いて月が見える瞬間の音楽。

少女 太陽が昇ってくる音楽。

少女 花が開く時に聞こえる音楽。

少女 ガラスのコップにミルクが注がれる音楽。

少女 木の扉をノックする音楽。

少女 雨の音楽。

少女 草の音楽。

少女 虫の音楽。

少女 種の音楽。

通達員 たね？

少女 種の殻がはち切れて、中から芽が出るときの音。それだけじゃなくて、種に耳をつけてれば私には聞こえるんだけど。

少女、握りしめた右手をベッドからそっと出す。

少女 あ。

少女 いま。

少女 芽の音。

通達員 め……？

少女 種って真っ暗闇の土の中に植えられるでしょう？ なのに地上がどこなのか誰に教えてもらったのかしら。上へ上へ伸びれば太陽に行き着くってどうして知ってるのかしら。太陽センサーでもあるの？ 違う違う違う、太陽の音楽が聞こえる方へ芽を伸ばすのよ。こっちから聞こえる。こっちこっちって太陽も呼ぶのよ、だから種は学校なんか行かなくても分かるの。親が教えなくたってこの小さい一粒でいいのよ。たった一粒で完璧なの。かたい茶色の殻を破って緑色、外は茶色なのに中が緑なのよ、種って何？ どういう配色？ だから今聞こえたこの音はきっと茶色の殻のほうじゃなくて、中身の緑の芽の音、緑色の音楽なのよ。種の中でぐるぐる渦巻いてるの、聞こえるよね？ ママ、

通達員 え？

楽隊の音楽、歪んだ。

少女 本当に聞こえるの、嘘言っってないよ、パパ、ねえ、置いていかないで。

歪む。

通達員 あのこと……？

ひび割れる。

少女 楽隊のことが嫌ならもう話さないからパパ！ ああ、また血で汚してごめんママ、ママ、パパ、こっち見て！ 背けないで！

音はひび割れ歪み続け、

通達員 大丈夫ですか……！？

まるで泣いているように。

少女 パパお願い、ママ、ひとりにしないで嫌だ嫌だひとりは嫌だ、パパ、許して、お願いママ、ひとりは嫌ひとりにしないでひとりは怖いの怖いの怖いの
ママママママママ……！

楽隊の音楽、大きく乱れて。

急激に小さくなる。

しかしまだ聞こえる。

少女、ぼったりとベッドに仰向けに。
目を見開いて。

少女 いいよ。置いていっても。

少女 恨まないよ。

少女 だって私こんなだもんね。

少女 いいよ。

通達員はゆっくりと少女を覗き込む。

少女 嘘だよ、ママ、パパ。本気にしないで。

少女 振り向いて。

少女 ドア閉めないで。

少女 置いてかないで……

少女、右手をゆっくり開く。

通達員、てのひらにある種を見る。

少女 まだ、聞こえてるのに……

少女の呼吸が聞こえる。

楽隊の音楽は、少女の呼吸とまるでセッションしている。

しかし小さく。

いまにも消えそうな。

少女 ね。聞こえているでしょう？

通達員、そっと少女の呼吸を聞き取る。

通達員 ええ、まだ。呼吸は止まっていません。まだ、かすかに……

その時、

通達員のスチールトランクから大きな警報が鳴り響く。

警戒警報のように。不安にさせるような響き。

通達員、スチールトランクを開ける。

と、警告の文字が浮かぶ。

「通達員へ」

「すべての通達員へ」

「明日、撤退」

「ここから退去せよ」

「すべての通達員へ」

通達員 まだ人がいます。

「やむなし」

通達員 まだここで呼吸をしています。

「や、むなし」

通達員 まだ生きています。

「や……むなし」

通達員 まだ……！

「移動可能な者を連れて退去せよ」

通達員は少女を抱きかかえようと試みる。

通達員 行きましょう。まだ聞こえているから、まだ……

ベッドから引き離すように少女を抱えて通達員が立ち上がる。
と、

カロン。

少女の手から種が転がった。

その瞬間、

少女の楽隊は止まる。

永遠に。

壊れたレコードのように警告は繰り返される。

「やむなし」

「や、むなし」

「や……むなし」

「や……むなし」

「……むなし……むなし……むなし……むなし……むなし」

通達員 ……楽隊の……楽隊の音楽、ね、私には楽隊なんてついていなかったけれど、その、音楽。生きているものには音がする、それはね、分かります。聞いていましたから。毎日毎日、いや、宇宙に時間などはないけれど、地球の時間でいうなら毎日ね、冷たくなった誰かの体を、私は毎日そこへ、あの広い宇宙へね、そっと送り出していて。もう地球上のどこにも埋葬できないほど溢れかえった冷たい誰かたちの体は宙にしか埋葬できなくて、今じゃそんなこと当たり前で、おかしいなあ、私は宇宙飛行士になりたかったのに、宇宙埋葬なんて毎日やって、語らない、喋らない誰かに語りかけながら、さようならって毎日言っていましたよ。だからほらもう、語らない体になった途端にこんなに言葉が止まらない。静かです。静かでした。語らない体と語らない宇宙ばかりでね。語るのは私ひとりだけで誰も答えてくれないからいつのまにか大声になるほどで、見ず知らずの誰かの冷たい体なのに僕はなぜか涙が込み上げてそんな感傷的な人間じゃないのにそっと宙へ無限の宙へ押し出しながら、大声で泣き叫んでいました。でもそれはあの音楽のね、あの音のせいだと思ったんですよ。いつもいつも聞こえる。そこから地球が見えました。語らないものばかりなのに聞こえるんです、それだけは。あれはね、地球の音なんだと思いました。まるで息をするみたいに、吸って吐いてを繰り返すような音楽、生き物のような。ああ、そう、生きている音……ね、音楽は、語るでしょう？ だからね、あの音を聞いているから僕は泣けたんじゃないかと、あれは、君が言うところの、地球の楽隊の音楽だったんだろうか。地球がまるで呼吸するみたいだね、そんな音楽がね、聞こえてきた。きっとあの頃、まだ地球は生きていたんだろう、か。今は、聞こえないんだろう、か。君の楽隊は、

止まったまま。

通達員 もう奏でないんでしょうか……

通達員、少女をそっとベッドに寝かせた。

ふと、床を見る。

何かを拾い上げた。

小さな種。

通達員はその小さな種に耳を傾けてみる。

何かを思い立って、戸口を出て土を掘ってみようとするが、やめた。

通達員 ……昨年くらいからね、どんな種を植えても何にも実らないんですの。

と、あの母親の言葉を口にしてみた。

通達員はベッドに横たわる少女の手の中に、その種を返す。しっかりと握り締めさせて。

通達員 私はなぜ終わりばかりを見送るのか……

通達員、スチールランクを仕舞ってここから去ろうとする。が、

通達員 ……置いていかないで……

通達員、考える。

宇宙で聞いた、地球の音がふと脳裏によぎる。

通達員 あれは……誰の言葉だったんだろう……？

スチールランクから、手を離す。

「すべての通達員へ」

「ここから退去せよ」

指令がまた響く。

ポケットから一枚のチケットを取り出す。
船のチケットではない。

通達員 なんだ……もう週末か。

あ、あの窃盗団の、芝居のチケット。

通達員 あの、

もう返事をしない少女を振り返る。

通達員 芝居を……こんな時に、芝居なんかやってる人たちが、いてね、いや僕には分からないですええ、芸術する人のことは、でも、2枚もね。お饞別にと。観に行くつもりじゃなかったのに2枚も、

少女を見る。

通達員 一緒に、観に行ければよかったのに。

通達員 1枚、無駄に……

通達員 ああ、あのご婦人に……きっとまだいるだろうから無駄にならなくてこのチケット、良かった……って……

通達員 すみません。何かを話していないと、耐えられそうにないんです。

通達員 ……ではまた来ます。

通達員は、ゆっくりと扉を閉めた。
が、きつとまた来るのだろう。

ベッドの傍らに、スチールトランク。そこから聞こえる。

「通達員へ」

「やむなし」

「すべての通達員へ」

「やむなし」

「撤退」

「やむなし」

「ここから退去せよ」

「やむなし」

「すべての通達員へ」

「やむなし」

「やむなし」

「やむなし」

「やむなし」

「やむなし」

答えるものは誰もいない。

やがて、トランクからの音も砂嵐の音に変化して、もう何も聞こえない。

が、よく見ると、床に、ひとつぶの種。

それだけが浮かび上がる。

よく見る。

その小さなひとつぶの種のまわりに、楽隊がいる。

手を動かす。

小さな種から、

小さな音がする。

呼吸の音楽。

それはやがて小さな芽の音楽から、

巨木の音楽へと変わる。

しかしそこに生きている人間はいないだろう。

おしまい